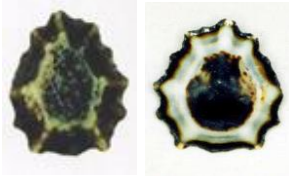
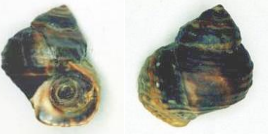
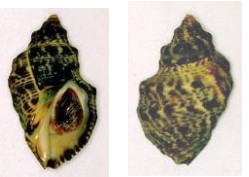


シニア自然大学校 森と海の自然科							年	2019		2020		21	2022		2022年9月5日	
泉南三河川河口域 生きもの調査 (近木川・男里川・樫井川)							月	7	10	8	10	10	6	9	指導 児嶋 格 先生 山田 浩二 先生	
							日	4	10	6	1	7	2	8		
No.	門	綱	目	科	和名	学名	写 真		近木川	男里川	近木川	男里川	樫井川	樫井川	近木川	備 考
1	海綿動物門	普通海綿綱	イソカイメン目	イソカイメン科	ナミイメソカ	Halichondria panicea (Pallas, 1766)			1 9 近							形は不規則で塊状。全面に細かい粒状の突起が発達する。潮間帯から水深550mの中深層まで広く分布し、岩や石の陰や窪みに着生する。体の色は黄緑色。水中の植物プランクトンを食べる。
2					クロイメソカ	Halichondria (Halichondria) okadae (Kadota, 1922)			1 9 近							本州中部以南の潮間帯の岩に付着して最も普通に見られる海綿。表面に大小様々な孔の空いた突起を生じ、凸凹している。体色は黒。体の中にフジツボが棲んでいる事がある。
3					ソダイカイダイメイ	Halichondria japonica (Sasaki, 1929)							2 1 樫			体は赤橙色、定形で大きさもさまざま。体表には無数の小孔が散在し、頂部先端に大孔が開いている。しばしば皮層にカイメンフジツボを共生させる。潮間帯に層をなして付着し、日本各地の沿岸に多い。
4	刺胞動物門	花虫綱	イソギンチャク目	ギンテジマクイソ	ギンテジマクイソ	Haliplanella lineata (Verrill, 1871)							2 1 樫	2 2 樫		潮間帯でごく普通に見られる。体長は2~3cm、口盤の径1.5~2cm、足盤の径2~2.5cm。体はほぼ円柱形、その表面は滑らか。体はその地色が暗緑色で、普通は赤か黄色の縦縞が多数ある。
5	軟体動物門	多板綱	新ヒザラガイ目	クサズリガイ科	ヒザラガイ	Acanthopleura japonica (Lischke, 1873)			1 9 近		2 0 近		2 1 樫			体は楕円形で平たく、背中には一列の8枚の殻(殻板)がある、殻の周りは肉帯という筋肉で囲まれ、トゲや鱗で覆われる。腹側は吸盤で這う。潮間帯の岩礁に付着する。はがされるとダンゴムシのように丸くなる防御姿勢を取る(別名「ジイガセ(爺が背)」の語源)。体長5cm~10cm。膝皿貝(ひざさがい)が語源か。
6				ケハダヒザラガイ科	ケハダヒザラガイ	Acanthochitona defilippii (Tapparone-Canevari, 1874)			1 9 近							潮間帯にいる。岩の上やくぼみに生息。新ヒザラガイ目共通で殻板は8枚。それぞれの殻板のそばにトゲのかたまりがある。はがされると身体を丸めることも他のヒザラガイ類と共通。体長3cm。
7				ケハダヒザラガイ科	ヒメケハダヒザラガイ	Acanthochitona achates (Gould, 1859)								2 2 樫		北海道南部以南に分布。体長最大40mm。潮間帯半ば以下の岩礁に生息。殻の両側の肉帯に9対のトゲの束が並び、微細な針がある。体長が60mmになるケハダヒザラガイより小型であることによる和名。

8	軟体動物門	多板綱	新ヒザラガイ目	ウスヒザラガイ科	ヤスリヒザ	Lepidozona coreanica (Reeve, 1847)		1 9 近							潮間帯から潮下帯の転石下に張り付く。他のヒザラガイ類より殻板の幅が広い。殻板の表面に縦の筋が多数あり、ヤスリ状になっている。体長3～7cm。
9		腹足綱	カサガイ目	ツタノハガイ科	マツバガイ	Cellana nigrolineata (Reeve, 1839)		1 9 近				2 1 椀	2 2 椀		殻長6～8cm。巻貝の仲間。大型のカサガイ類で、表面は平滑で、青っぽい灰色のスジと灰色地に赤かつ色の細い帯がある。網目模様になることもある。潮間帯の岩礁。夜間の活動時間が長い。
10					ヨメガカサ(ガイ)	Cellana toreuma (Reeve, 1854)		1 9 近		2 0 近		2 1 椀	2 2 椀		殻長4～6cm。マツバガイより背が低い。殻は細長く表面が放射状の細い筋がある。模様は変化にとんでいる。潮間帯の岩礁。潮の満ち引きに従い、波打ち際を上下に移動する。
11				ユキノカサガイ科	(ウノアシ)	Patelloida saccharina (Linnaeus, 1758)		1 9 近		2 0 近		2 1 椀	2 2 椀		殻長3.5cm。殻は厚く殻頂部は強く浸食される。殻表には7～10本の強い肋(ろく・稜)があり、周縁部で突出して、鳥の「鵝」の水かきのついた足に見立てられる。潮間帯の岩礁。潮が満ちた波打ち際を動き回って藻類を食べ、また元の場所に戻る。
12					コウダカア	Nipponacmea concinna (Lischke, 1870)				2 0 近					殻長3cm前後。正円に近い楕円形。殻頂は前端よりにある。殻表に放射線状に顆粒列が並んでいる。貝殻の裏側は薄青い。殻表は全面暗緑色のものと黄褐色の斑点の出るものと2タイプがある。潮間帯の岩礁上部。昼間は岩陰に隠れている。
13					クモリア	Nipponacmea nigrans (Kira, 1961)					2 0 男	2 1 椀	2 2 椀		殻長2cm。殻長は前方にかたよりやや高い。殻の表面には放射状の筋(放射肋)が密に並ぶ。殻の模様は固体により多様。潮間帯半ばの岩礁のすき間や転石の下にいる。
14					コモレピコ	Lottia tenuisculpta (Sasaki & Okutani, 1994)		1 9 近				2 1 椀	2 2 椀		殻長1.3cm。殻表には均一な太さの細肋が全面にある。黒褐色白の地色に白い放射彩色を基本とするが、変化が多い。潮間帯岩礁下部に住む。フジツボと共に生息している。
15					シボリガイ	Patelloida signata (Pilsbry, 1901)					2 0 男		2 2 椀		殻長15mm以下。殻口が楕円形の低い円錐形。白地に褐色の放射線が約8条のびる。殻内面は白色。潮間帯の岩礁。

16	軟体動物門	腹足綱	カサガイ目	ヨメガイ科	サベツコウガイ	Cellana stearnsii (Pilsbry, 1891)						2 1 椀		殻長35-60mm、殻幅30-50mm前後の楕円形で、殻頂は前寄りにある。潮間帯の岩礁部でふつうにみられる。殻の内面には真珠光沢があり、光に透かして見ると美しい亀甲模様に見え、これが和名の由来。
17			基眼目	カラマツガイ科	キクノハナガイ	Siphonaria sirius (Pilsbry, 1894)		1 9 近		2 0 近		2 1 椀	2 2 椀	殻長2cm。カサガイ類のウノアシに似ているが、放射状の肋の間に細い肋がある。潮間帯中部の岩礁に生息。本種は肺呼吸。ウノアシはえら呼吸。藻類を食べに出かけ同じ道をたどって元に戻る習性がある。右は内面。左上に空気呼吸用の穴がある。 
18					カラマツガイ	Siphonaria japonica (Donovan, 1824)		1 9 近		2 0 近		2 1 椀	2 2 椀	殻長1.9cm。潮間帯上部、岩礁。殻長約1、5cm。本種も肺呼吸。殻は笠形で灰色、内面はこい褐色で、ふちは黄色。表面に15本ほどの放射状の肋がある。キクノハナガイとともに、潮が引いた後しばらくの間動き回り、また元の場所(いわば家)に戻る。肺呼吸。
19			中腹足目(盤足目)	タマガイ科	ツメタガイ	Glossaulax didyma (Röding, 1851)		1 9 近			2 0 男		2 2 ア	殻長5cm。ツメタガイの仲間は卵と砂を粘液で固めて「砂茶碗」とよばれる茶碗形の卵嚢を作る。アサリなどの二枚貝を捕食する。獲物を捕まえると、やすりのような歯舌を用いて獲物の殻頂部を削り、2mm程度の穴をあけて軟体部を食べる。 
20				カリバガイ科	シマメノウ	Crepidula onyx (Sowerby, 1914)		1 9 近						本来は北米原産の外来種。殻長3cm。殻表がほとんど平滑で不規則な褐色斑や縞がある。アワビ類やアカニシ。アズマニシキなどの生きた貝類の殻の上に付着し、排泄物などを食べる。
21				ムカデガイ科	オオヘビ	Serpulorbis imbricatus (Dunker, 1860)		1 9 近						殻幅は5cm。巻き貝の仲間であるが、殻の一部あるいは大半を岩盤に付着させ、トグロを巻いた状態で成長する。殻口から粘液の糸を出して餌をからめ取りこむ。潮間帯の岩礁。
22				タマキビガイ科	アラレタマキビ	Nodilittorina radiata (Souleyet in Eydoux & Souleyet, 1852)		1 9 近	1 9 男	2 0 近		2 1 椀	2 2 椀	殻長8mm。小型だが殻は堅固。タマキビより上の、波当たりの強い潮間帯の最上部。飛沫帯に住む。潮が満ちてくるとそれに追われるように岩を這い上がり、潮が引くと濡れている間に下りてくる。貝であるのに、水をきらう。

23	軟体動物門	腹足綱	中腹足目 (盤足目)	タマキビガイ科	タマキビ	Littorina brevicula (Philippi, 1844)				20近	20男	21椀	22椀	殻長1.5cm。殻はソロバン玉形。殻表には3殻5本の強い螺肋が走る。表面の模様には個体差があり、多様性がある。潮間帯の岩礁。活動は冬に活発で、夏は夏眠という形で岩の隙間でじっとしている。貝であるのに水をきらう。
24				タマキビ	マルウズラ	Littoraria (Palustorina) articulata (Philippi, 1846)		19近	19男	20近	20男	21椀	22椀	殻長1.5cm。殻は褐色色で、螺層の膨らみは強く、細かいウズラ模様がある。縫合はくびれる。転石・テトラポットに着生。河口護岸壁の裂け目などにも付着。
25			新腹足目	アツキガイ科	アカニシ	Rapana venosa (Valenciennes, 1846)		19近			20男			殻長10cm。殻口の内面が赤みを帯ている。30mより浅い砂泥底。アツキガイ科の巻貝の鰓下腺(パープル腺)から得られる黄緑色の分泌物は、日光で紫色に変化し安定する。強い臭素を含んでいるが、古代から世界各地で貝紫の染料とされていた。 →次のイボニシの説明図参照
26					イボニシ	Thais (Reishia) clavigena (Küster, 1860)		19近	19男	20近	20男	21椀	22椀	殻長3~5cm。転石・テトラポットに着生。口縁は黒い。岩礁のフジツボ類や二枚貝に穴を開けて肉を食べる。6月~8月、岩の下に群れて卵のうを産みつける。 右は「三重県水産図解」(明治16年)の海女。護身符として頭かぶりに貝紫でセーマン ☆ やドーマン 𠬪 を染めていた。
27					イボニシの卵	Thais (Reishia) clavigena (Küster, 1860)		19近						
28				ウミニナ科	ウミニナ	Batillaria multiformis (Lischke, 1869)		19近	19男	20近	20男	21椀	22椀	殻長3.5cm。干潟や潮間帯の砂泥底に群がっている。泥の上を歩き回り、表面の有機物や藻類など食べる。口が張り出す。
29					ホソウミ	Batillaria attramentaria (G.B.Sowerbyll, 1855)			19男		20男		22椀	殻長3cm。海岸の砂泥地や岩礁に生息する。ウミニナより細長い。ウミニナと違って浮遊幼生にならず子貝になる。貝殻の色は灰色や黒褐色で縫合に沿って白い彫刻のようなものがある。潮間帯の砂底。ウミニナより低い潮位にすむ。
30				ムシロガイ科	アラムシロ(ガイ)	Reticunassa festiva (Powys, 1835)		19近			20男	21椀		殻長1.5~2cm。潮干狩りの時に砂浜を歩いている姿を見かける。殻の色は黄色に近いクリーム色。溝の部分は黒い。殻のいぼはやや大きめ。河口干潟などの砂泥底にすむ。粗いムシロのような外見からの和名。ムシロガイ類は代表的な死肉食性で「海の掃除人」。

31	軟体動物門	腹足綱	新腹足目	フトコロガイ科	ムギガイ	Mitrella bicincta (Gould, 1860)		1 ♀ 近					2 2 ア	殻長10mm。殻は細くとがり円筒形。表面は平滑でやや光沢がある。褐色のしまなど模様は変化が大きい。殻口は立てに細長くやや開く。潮間帯から潮下帯の岩礁に着く。
32			古腹足目	ニシキウズガイ科	イシダタミ	Monodonta confusa (Tapparone-Canefri, 1874)		1 ♀ 近	1 ♀ 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	殻高2cm。殻の表面に、石だたみのような模様が出るのでこの名がある。潮間帯の中部域の岩礁に普通に見られる。波打ち際には岩の表面に出て活発に摂食活動をし、干潮時には岩陰に隠れる。
33					クロイツケガ	Monodonta neritoides (Philippi, 1849)		1 ♀ 近	1 ♀ 男		2 0 男			殻高1.5cm。イシダタミより小さく、背が低い。表面がなめらか黒地に細かい赤と緑の斑点がある。潮間帯の岩礁。
34					コンシダラカガ	Omphalius rusticus (Gmelin, 1791)		1 ♀ 近			2 0 男	2 1 椀		殻高2.8cm。転石・テトラポットに着生。殻はクボガイよりも色が薄く灰色。うねは太く、へそ穴は丸く深く開く。 <u>クボガイ</u> 
35					サザエ科	スガイ	Lunella coreensis (Récluz, 1853)		1 ♀ 近		2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀
36			アマオブネガイ目	アマオブネガイ科	イシマキガイ	Clithon retropictus (Martens, 1879)		1 ♀ 近	1 ♀ 男	2 0 近	2 0 男			殻長1～3cm。殻は丸みが強くてよく膨れ、螺塔は低い。幼生は海で育ち、幼貝になると川をさかのぼり、淡水にすむようになる。河川の河口から中流域の岩礁。岩の表面の藻類を食べる。
37			盤足目	カワサンシヨウガイ科	クリイロカワザンシヨウ	Angustassiminea castanea (Westerlund, 1883)			1 ♀ 男		2 0 男			殻長4.5mmと小型で円錐形をしている。黒っぽい茶色で光沢がある。河口干潟や内湾ヨシ原内の転石の間に生息する。
38			翼舌目	イトカケガイ科	イナバザイ	Alexania inazawai(Kuroda, 1943)				2 0 近				殻長7mm。潮間帯の岩につくタジマイソギンチャクに付着する。石灰質の蓋を持つ。2002年9月近木川河口で初記録(貝塚市自然遊学館「自然遊学館だより2002 冬号(No.26)」参照。

39	軟体動物門	腹足綱	翼舌目	ハナゴウナ科	ヒモイカリナマコ ツマミガイ	Mucronalia lactea A. Adams, 1864							2 2 椀	関東以西の内湾に分布する。内湾奥部や河口の干潟の干潮時に露出する礫や貝殻混じりの砂泥中に浅く潜行して生活するヒモイカリナマコに内部寄生(寄生?)する。殻長5mmほどの紡錘形をし、殻頂部は突出する。殻表面は光沢があり平滑。殻はほぼ透明で、生時は黄色の軟体や内臓が透けて見える。写真右はヒモイカリナマコ体内のヒモイカリナマコツマミガイ。
40			吸腔目	キバウミナ科	フトヘナタリ	Pirella nipponica(A. Adams, 1855)			1 9 男		2 0 男			殻長4cm。口吻が全体的にクリーム色のまだら模様をしている。河口の汽水域の干潟に砂泥底やアシ原に生息。殻頂が消失していることが多い。徒然草34段「甲香は、ほら貝のやうなるが小さくて口のほどの細長にして出でたる貝のふたなり。武蔵国金沢といふ浦にありしを所の者はへなたりと申し侍るとぞ言ひし」。
41				トゲカワニナ科	カケノコ	Stenomelania rufescens (Martens, 1860)			1 9 男		2 0 男			殻長5cm。カワニナ類と似ているが、別のグループ。熱帯域にたくさんの種類がいる。河口に近い河川の砂泥底。砂泥中の有機物を食べる。汽水域の小石混じりの砂泥地。
42			異旋目	トウガタガイ科	チカキレモド	Brachystomia bipyramidata (Nomura, 1936)					2 0 男			殻長5mm。乳白色で黄褐色の殻皮をかぶる。潮間帯の干潟や岩礁のマガキの体液を吸う。
43			頭楯目	ヘコミツラガイ科	コメツブガイ	Retusa (Decolifer) insignis (Pilsbry, 1904)						2 2 ア		5mm程度の微小貝。潮間帯に近いアマモ場の砂浜によく生息する。大阪湾ではアマモ場の減少と共に希少種となっていたが、最近h採集例が増えつつある。近似種にマツシマコメツブがある。コメツブガイの方が螺塔が飛び出している。「自然遊学館だより」No.74(2015年2月16日貝塚市自然遊学館発行)参照。
44		二枚貝綱	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科	アサリ	Ruditapes philippinarum (Adams and Reeve,1850)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀 ア	潮間帯や遠浅の砂泥地に生息。殻高は2.5cm、殻長は3.5cm、殻幅は1.5cmほど。殻は横長の楕円形で厚く、よく膨らむ。殻表面は粗い布目状となっている。その模様や色の変化は極めて多様である。
45					ヒメアサリ	Ruditapes variegata (Sowerby, 1852)					2 0 男			アサリより小型であるための名。とくに殻幅が薄い。潮間帯～水深5mの外洋に面した岩礁域の岩、石などの間の砂地。アサリと違い生息数が少なく漁獲対象ではない。しかし、海水で砂出しをし、水から煮込んでみそ汁にすると大変美味。大阪湾にも少ない。岬町には生息。

46	軟体動物門	二枚貝綱	マルスダレガイ目	シジミ科	ヤマトシジミ	Corbicula japonica (Prime, 1864)		1 9 近							河口の汽水域の砂底に生息。殻は丸みを帯びた三角形で、よく膨らむ。殻頂は高い。殻皮は光沢のある黒色。殻長約3cm。
47				イワホリガイ科	セミアサリ	Claudiconcha japonica (Dunker, 1882)		1 9 近		2 0 近					殻長3cm。潮間帯～水深10cm。柔らかな泥岩・サンゴやゴカイの棲管の群塊などのすき間に住み着く。外形は不規則なことが多い。右殻が左殻より大きく、かつ左殻を抱き込むような形になる。
48				チドリマスオ科	クチバガイ	Coecella chinensis (Deshayes, 1855)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男		2 2 ア		殻長2.5cm。長楕円形。潮間帯上部の砂～砂礫底に生息する。殻は黄褐色の殻皮に被われる。内面は白色。
49				フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	Trapezium liratum (Reeve, 1843)			1 9 男		2 0 男				殻長4cm。長楕円形。殻はやや薄く、膨らみは弱い。表面は平滑。汽水域の潮間帯の礫やマガキなどの殻に足糸(そくし)で付着する。
50				バカガイ科	バカガイ	Mactra chinensis Philippi, 1846							2 2 ア		北海道から九州までの潮間帯から水深20m程度までの海の砂泥地に多く住む。食用貝としてよく広く知られている。大きさは60mm前後。むき身はアオヤギ(青柳)と呼ばれ、すしネタとなる。
51				マテガイ科	マテガイ	Solen strictus (Gould, 1861)							2 2 ア		北海道南部以南の内海の砂浜に見られる。特に西日本で多く食用とされる。特徴的な細長い形の薄い殻を持ち、10cm程度になる。砂に数十cm～1m程度の穴を掘り住む。巣穴に塩を振り込み巣穴から飛び出す貝を捕らえる独特の捕獲法がある。
52			フネガイ目	フネガイ科	カリガネエガイ	Barbatia virescens (Reeve, 1844)		1 9 近				2 1 椀	2 2 椀		殻長5cm。中潮帯から低潮帯の岩礁のすき間に足糸で付着する。殻は白く膨らみは弱い。成長脈は周期的に強くぎざまれる。殻皮は周辺で厚く、毛状になる。
53			イガイ目	イガイ科	ホトトギスガイ	Musculista japonica (Dunker, 1857)		1 9 近		2 0 近	2 0 男		2 2 ア		殻長2.2cm。薄質で扁平。殻皮は緑褐色。足糸でからまって群れ、海底に敷き詰めたように集団で生活している。内湾の潮間帯から水深10mまでの砂泥底。
54					クロゲチガイ	Xenostrobus atratus (Lischke, 1871)			1 9 男		2 0 男				殻長1.5cm。やや薄質でやや扁平。短く高い。殻皮は黒紫色で平滑。潮間帯上部から中部にかけての岩やマガキに着生。イワフジツボと混生すること多い。

55	軟体動物門	二枚貝綱	イガイ目	イガイ科	ワウバリエガイカ	Xenostrobus securis (Lamarck, 1819)			1 9 男		2 0 男		2 2 椀		殻長2〜3cm。殻皮は黒紫色で平滑、光沢がある。オーストラリア方面が原産。1970年代後半に日本に定着。発見された西宮市の香櫨園浜にちなみ、菊池典男氏により命名。内湾の潮間帯から水深10mまでの護岸やカキ殻などに付着。
56			ウミタケガイ目	オキナガイ科	ソトオリガイ	Laternula (Exolaternula) marilina (Reeve, 1863)				2 0 近		2 1 椀		殻長5cm。これよりはるかに長い水管を出す。水管は完全に殻の中に収まらない。殻は薄く半透明でよく膨らむ。ちようつがいの上下に細い縦筋が通る。潮間帯から水深20mまでの砂泥底。ソトオリは「衣通(そとおり)」が語源。衣通姫は、その美しさが着物を通り抜けて感じ取られたとされる記紀に登場する女性。	
57			カキ目	イタボガキ科	マガキ	Crassostrea gigas (Thunberg, 1793)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	殻高15cm。殻長15cmの長楕円形を基本とするが、固着する対象により殻形は変化する。汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底によくカキ礁を作る。マガキガイ(高腹足目ソデボラ科)という貝は別種。 マガキガイ(殻長6cm)→ 	
58			カキ目	イタボガキ科	ケガキ	Saccostrea kegaki (Torigoe & Inaba, 1981)		1 9 近		2 0 近		2 1 椀	2 2 椀	殻高5cm。殻長8cmの小型のカキ。不定形であるが基本は楕円形。小さい時は殻周縁が紫色に染まり、パイプ状突起が顕著である。潮間帯から潮下帯の岩礁や岩壁に付着し群生する。	
59					イワガキ	Crassostrea nippona (Seki, 1934)		1 9 近	1 9 男					殻高12cm。殻長は20cm以上になる。長楕円形で厚質。殻頂(殻のてっぺん)で岩に着く。殻の周縁や表面には突起はないが、何枚もの薄い板をを重ねたような構造となっている。食用。潮間帯から3mの岩礁。	
60	星口動物門	スジホシムシ綱	スジホシムシ目	スジホシムシ科	スジホシムシ	Sipunculus nudus (Linnaeus, 1766)							2 2 ア		本州、四国、九州の潮間帯から浅海までの砂泥中に穴を掘ってすむ。体はやや赤みを帯びた乳白色の円筒形で、長さは10〜20cm、幅1〜1.5cm。表面は滑らかであるが、体壁の縦筋層と環筋層が規則正しく交差して碁盤目状になっている。
61					スジホシムシモドキ	Siphonosoma cumanense (Keferstein, 1867)								2 2 ア	

62	環形動物門	多毛綱	サシバゴカイ目	ゴカイ科	ヤマトカワゴカイ	Hediste diadroma (Sato & Nakashima 2003)							2 2 椀	体長10～15cm。各地の河口～汽水域の砂泥中に棲む。従来、ゴカイ(Hediste japonica (Izuka,1908))とされてきた種は、現在は、ヤマトカワゴカイ・ヒメヤマトカワゴカイ・アリアケカワゴカイの3種に分割されている。 →(Sato, Masanori and Nakashima, Akiyuki (2003)
63			ケヤリ目	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイの棲管						2 0 男	2 1 椀		カンザシゴカイは、環形動物門多毛綱定在目カンザシゴカイ科Serpulidaeに属する種類の総称。頭端にある鰓冠(さいかん)の一部が変形してできた殻蓋(かくぶた)をかんざしに見立てて名づけられた。虫体はいずれも石灰質の管の中にすみ、殻蓋で管の入口をふさいで身を守る。
64			フサゴカイ目	ミズヒキゴカイ科	ミズヒキゴカイ	Cirriformia tentaculata (Montagu, 1808)							2 2 ア	体長3～15mm。体はやや太くてずんぐりしている。眼はない。日本全国の浅海域に分布。砂泥性海岸の潮間帯に普通にみられ、かなりの汚染域にも群棲する。写真の個体は触手が出ている状態。
65		貧毛綱	新貧毛目	フトミミズ科	イソミミズ	Pontodrilus litoralis (Grube, 1855)		1 ♀ 近					2 2 椀	体長10cm、体幅2mm内外。腹面に挟着器を持つ海産のミミズ。体節約100。環帯は13～17節ある。岩石に覆われた磯のような環境には生息しないことから「ハマミミズ」という名が、よりふさわしいという説がある。
66	節足動物門	顎脚綱	無柄目	クロフジツボ科	クロフジツボ	Tetracitidae Gruvel, 1903							2 2 椀	高さ4cm、底面の直径5cmに達する大形種。岩礁の潮間帯上部に群れをなしてつき、クロフジツボ層を形成する。本州北部より九州南端まで分布。急な円錐形で、厚い4枚の周殻よりなり、境界がはっきりしないことが多い。殻口は円形で、小形個体では小さいが、老成すると大きくなる。地方によっては軟体部をみそ汁の実にする。
67				フジツボ科	タテジマフジツボ	Balanus amphitrite (Darwin, 1854)		1 ♀ 近	1 ♀ 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	直径1～2cm。殻表はなめらかで、暗紫色の縦縞模様がある。潮間帯～水深50cmの岩礁。岩に固定し、6対の白い蔓脚でエサを集める。外来種。
68					シロスジフジツボ	Balanus albicostatus (Pilsbry, 1916)			1 ♀ 男		2 0 男	2 1 椀	2 2 椀	直径 2cm。殻口は広く、ほぼ五角形。各殻板は灰褐色ないし暗紫灰色で、数本の太い白色の縦走肋をもつ。内湾性で、特に河口付近の岩礁や桟橋の橋桁などに群生して固着し、低塩分濃度によく耐える。本州各地から台湾、中国に分布する。

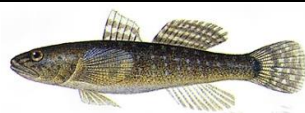
69	節足動物門	顎脚綱	有柄目	ミヨウガイガイ科	カメノテ	Pollicipes mitella (Linnaeus, 1758)		1 9 近		2 0 近		2 1 椽	2 2 椽	大きさは3～4cmが普通だが、7cmに達する個体もある。形がカメの前足に似ている。潮間帯岩礁の割れ目に群生し、波によって運ばれてくる餌を紫色を帯びる蔓脚を伸ばげて捕食する。 蔓脚を伸ばげたカメノテ→	
70			等脚目	フナムシ科	フナムシ	Ligia exotica (Roux, 1828)		1 9 近				2 1 椽	2 2 椽	体長5cm。体は平たく多くの節にわかれ、7対の歩脚がある。頭部には長い触角と大きな複眼があり、尾部には2つに枝分かれした尾脚が1対ある。熱帯から温帯の海岸に広く分布し岩場をすばやく走り回る。泳ぎは上手だが水中で過ごすことはない。	
71		軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	オサガニ科	オサガニ	Macrophthalmus abbreviatus (Manning & Holthuis, 1981)				2 0 近				甲長17mm、甲幅35mmまで。甲の長さが幅の2倍ほど。横長で四角い。眼柄が白くて長い。オスのハサミにツブツブがある。水通しのよい内湾や砂質底に生息。	
72					ヤマトオサガニ	Macrophthalmus japonicus (De Haan, 1835)			1 9 男		2 0 男	2 1 椽	2 2 椽	甲長30mm、甲幅40mmまで。横長で四角い。眼柄が長い。河口の泥干潟にすみ斜めの巣穴をほる。泥の中の有機物を食べる。ウェイピングは、ハサミが目の高さまでしか上がらず、かつ開かない。(ヒメヤマトオサガニのウェイピングは、ハサミが高く上がりかつ開く、万歳型。)	
73				コメツキガニ科	コメツキガニ	Scopimera globosa (De Haan, 1835)		1 9 近		2 0 近		2 1 椽		甲長9mm、甲幅10mmまで。内湾や河口干潟の砂質・砂泥底に生息。干潟で最も一般的なカニ。養分をこし取った砂泥をだんごのように丸めて巣穴の周りにばらまく。目が飛び出している。	
74				モクズガニ科	モクズガニ	Eriocheir japonica (De Haan, 1835)					2 0 男	2 1 椽	2 2 椽	甲幅は8cm、体重180gほどに成長する。ハサミに長い毛が密生し、藻屑に見えることから和名。河川の河口から中流域。秋に河口に下り幼生を海に放つ。初夏に稚ガニが川を上る。食用で有名な「上海蟹」の同属異種。日本各地で食用にされている。	
75					アシハラガニ	Helice tridens (De Haan, 1835)			1 9 男		2 0 男			甲長22mm、甲幅25mm程度。全体的に緑色をおびた褐色でハサミ脚は黄色をおびている。河口域に生息して、アシ原に巣穴を掘る。	

76	節足動物門	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	モクズガニ科	ヒメ ガニ シ ハラ	Helicana japonica (K. Sakai & Yatsuzuka, 1980)					2 0 男				甲幅20mm程度。アシハラガニよりも小さく、また、短くてやわらかい毛が前から3または4本目までの脚に生えている（アシハラガニは2本目まで）。
77					ヒライ ソ ガ ニ	Gaetice depressus (De Haan, 1833)		1 9 近		2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀		甲長20mm、甲幅25mm程度。岩礁域の転石場に多い。インガニに比べ甲が平坦で、色彩や模様の変化に富む。口元の顎脚を使って水の中から有機物をこし取る特異な採餌を行う。雄はハサミが大きい。子どもには甲に白い斑文がある。
78					ソケ ガ ニ （ 仮 ヒ ライ）	Gaetice sp.		1 9 近							ヒライソガニよりやや小型。甲の背面が平たく歩脚に短い毛が生えているのが特徴。
79					イ ソ ガ ニ	Hemigrapsus sanguineus (De Haan, 1835)		1 9 近				2 1 椀	2 2 椀		甲長31mm、甲幅38mm程度。磯で普通に見られるカニでオスのハサミの根元に柔らかいふくろのようなものがついている。ヒライソガニより甲に膨らみがある。
80					ケ フ サ イ ソ ガ ニ	Hemigrapsus penicillatus (De Haan, 1835)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 椀		甲長30mm、甲幅35mm程度。オスのハサミの又に毛のふさがある。オス・メともに裏側の腹の上部を中心に小さな黒斑がある。 
81					タ カ ノ ケ フ サ	Hemigrapsus takanoi (Asakura and Watanabe, 2005)		1 9 近				2 1 椀	2 2 椀		甲長30mm、甲幅35mm程度。ケフサイソガニよりハサミの毛のふさが大きい。また腹部にある斑点が少ない。 
82					トリ ウ ミ ア カ イ ソ モ ト キ	Sestrostoma toriumii (Takeda, 1974)							2 2 ア		砂地に生息する小型のカニで、スナモグリ類の掘った穴に共生することが知られています。（甲巾3mm・アナジャコ科・スナモグリ科の甲殻類の巣穴内に共生する）

83	節足動物門	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	ケブカガニ科	マキトラノオガニ	<i>Pilumnopus makianus</i> (Rathbun, 1931)						2 1 桎	2 2 桎	和歌山県から沖縄県までに分布する。甲幅30mm。河口域や干潟に生息する。カキ礁やカキ群集の隙間に好んで棲む。同じような場所で見られることの多いシワオウギガニと比較すると、マキトラノオガニは甲面や歩脚に軟毛が粗生することで見分けられる。21桎ではカンザシゴカイの棲管で見つかった。
84				コブシガニ科	マメコブシガニ	<i>Pyrhila pisum</i> (De Haan, 1841)		1 9 近						甲長15mm、甲幅15mmほど。甲は丸く、中央が盛り上がり、表面につぶつぶがある。干潟にいるコブシガニの仲間。前に向かって歩く。
85				ベンケイガニ科	イカクベンケイガニ	<i>Parasesarma pictum</i> (De Haan, 1835)			1 9 男		2 0 男			甲長23mm、甲幅26mm程度。甲羅はわずかに横長の四角形で、縁に歯はなく全体的に褐色。クリーム色のまだら模様がある。岩礁やアシ原に生息し、海水の影響が強い場所に多い。
86					ユビアカベンケイガニ	<i>Parasesarma tripectinis</i> (Shen, 1940)					2 0 男			甲幅15mmほどで、カクベンケイガニより小型。和名通り鉗脚(ハサミ)の先が赤い。甲は扁平に近い。黄褐色の体色。、汽水域の砂泥干潟やアシ原に生息するクシテガニとよく似ているが、クシテガニはハサミ全体が赤っぽいのに対して、本種はハサミの先だけが赤い。
87					ヒメベンケイガニ	<i>Nanosesarma minutus</i> (De Man, 1887)		1 9 近				2 1 桎	2 2 桎	甲長6mm、甲幅7mm程度。甲の前縁中央部に深い窪みがある。前縁には眼後歯に切り込みがある。潮間帯の岩礁や貝類の間に生息する。干潟でも外洋側のカキ殻の間でも見つかる。
88					フタバカクガニ	<i>Perisesarma bidens</i> (De Haan, 1835)			1 9 男					甲長23mm、甲幅26mm程度。ハサミがオレンジ色に見えるものが多い。甲羅の横に切れ込みがある。汽水域の水辺にある転石の下や石積のすき間に隠れている。
89				スナガニ科	ハクセンシオマネキ	<i>Uca lactea</i> (De Haan, 1835)		1 9 近	1 9 男		2 0 男	2 1 桎		甲長12mm、甲幅20mmまで。ハサミは白く、片方が巨大化。それを白い扇(白扇)に見立てられての和名。ウェイピングで大きなハサミを大きく振り回す。その姿が潮を招くと見立てられた。アシ原に巣穴を作る。干潟に出て砂に付着する有機物を食する。
90					マネキシオ	<i>Uca arcuata</i> (De Haan, 1833)			1 9 男		2 0 男			甲長25mm、甲幅35mmまで。ハサミや脚は赤色を呈する。片方のハサミが巨大化。内湾や河口干潟のアシ原や泥地に生息。巣穴の上に土を積み上げえんとつ状にする。有明海沿岸の郷土料理「がん漬」の主要材料。

91	節足動物門	軟甲綱（エビ綱）	十脚目（エビ目）	ワタリガニ科	ガザミ（ワタリガニ）	Portunus trituberculatus (Miers, 1876)			19男（殻）			21	22ア		甲長60mm、甲幅150mm程度。甲羅の横が強くつきだし大きなトゲのようになる。浅海砂底に生息。 19男 では脱皮殻が2個ほど見つかる。
92					イシガニ	Charybdis japonica A. Milne-Edwards, 1861						22ア		北海道南部から九州までの太平洋、日本海側。韓国、中国。岩礁海岸の潮下帯に生息し、海中の岩石のすき間や海藻の間に潜む。甲幅は8cmほどだが、10cmを超える大型の個体もいる。	
93				ホンヤドカリ科	ホンヤドカリ	Pagurus filholi (De Man, 1887)				20男	21	22		甲長5～15mmの小型のヤドカリ。甲背、脚とも緑褐色だが、脚の先端が白く(赤矢印)「白足袋を履いている」と言われる。はさみ(鋏脚=第1胸脚)は右側が大きい。人目に付きやすい第二触角は濃淡の縞模様となる(青矢印)。	
94					ユビナガホンヤドカリ	Pagurus minutus (Hess, 1865)			19男	20近	20男	21	22		甲長5～15mmの小型のヤドカリ。灰緑褐色。歩脚は毛でおおわれている。はさみ(鋏脚=第1胸脚)は右側が大きく、表面に小さな顆粒が密にある。第2・3歩脚は指節(一番先)が前節(指節のすぐ下の節)よりも長く、これが和名「指長」の由来。
95				クルマエビ科	クルマエビ	Marsupenaeus japonicus (Bate, 1888)							22ア		体長15cmほどだが、メスの中には30cmに達するものもある。体は細長い円筒形で、脚は太く短い。生体の体色は青灰色か淡褐色で、黒いしまが頭胸甲には斜め、腹部には横に入る。日本産のクルマエビ科の中では最もしま模様が明瞭なので近縁種と区別できる。クルマエビの和名は腹を丸めた時に、しま模様が車輪のように見えることに由来する。
96					ヨシエビ	Metapenaeus ensis (De Haan, 1844)						21			成体の体長はオス150mm、メス180mmほどに達し、同属種のシバエビやモエビより大型になる。甲は薄くて柔らかく、全面に細毛がある。新鮮な個体は褐色の地に細かい黒点が密布し、触角、脚、尾扇が赤褐色を帯びる。大阪では「しらさえび」、高知では「きえび」などと呼ばれる。
97				テナガエビ科	ユビエビガス	Palaemon macrodactylus (Rathbun, 1902)						21	22	22ア	最大で体長4cmほど。汽水域や河口、干潟など様々な場所で見られるエビで、「ユビナガ」の名前の通りハサミ脚(第2胸脚)が長い(「テナガエビ」ほどではない)。体色は半透明で背中や腹部がやや褐色ついたものが多い。

98	節足動物門	(エビ綱)	十脚目 (エビ目)	テナガエビ科	スジエビ モドキ	<i>Palaemon serrifer</i> (Stimpson, 1860)		1 9 近	1 9 男	2 0 近	2 0 男	2 1 椀	2 2 ア	体長4cmまで。ユビナガスジエビとよく似るが、「スジエビモドキ」の腹部の背中側にはスジ模様が入ることや、ユビナガスジエビの背中の中心には薄い黄色い線が1本走るという特徴から見分けができる。イソスジエビにも似るが、黒褐色の縞がイソスジエビよりまばらで、腰部分のベルト状の赤い縞が特徴。
99				テッポウエビ科	セジロムラサキエビ	<i>Athanas japonicus</i> (Kubo, 1936)							2 2 ア	スナモグリやテッポウエビの巣穴に共生している小型のテッポウエビの仲間。背側に白い筋が入っていることが「セジロ」の由来。
100				アナジャコ科	アナジャコ類	<i>Upogebia</i> sp.				2 0 近 (殻)		2 1 椀	2 2 椀	泥干潟にY字型の深い巣穴を掘り、腹部にある遊泳脚を利用して海水の流れを起し、口部付近に密生するヒゲでプランクトンや有機質の粒子を濾しとって食べる。日本列島沿岸域には、アナジャコ属ヨコヤアナジャコ、ナルトアナジャコなど数種が分布する。
101				スナモグリ科	グリホンズナモ	<i>Callianassa japonica</i> (Ortmann, 1892)							2 2 ア	透明がかった白い色のエビで、片方のはさみだけが不釣り合いに大きく、挟まれるとかなり痛い。潮が引いたときの潮だまりの中や周りで、周りの砂よりも黒ずんだ富士山状の巣穴を作る。巣穴は深く、4～5mに達することもある。甲は柔らかい。釣り餌としては「ばけ」と呼ばれる。
102			端脚目 (ヨコエビ目)		ヨコエビ類	<i>Amphipoda</i> sp.	写真なし						2 2 椀 ア	
103	棘皮動物門	ヒトデ綱	叉棘目	キヒトデ科	マヒトデ	<i>Asterias amurensis</i> (Lütken, 1871)		1 9 近						幅長15cm。「キヒトデ」「ムラサキヒトデ」「アムールヒトデ」とも呼ばれる。黄色の身体に青紫色の模様があるが、色や模様は個体差が大きい。湾内だけでなく外洋に面した砂地の浅瀬にも生息。基本的にアサリを襲って食べるのでアサリの産地などでは駆除の対象となっている。
104		ナマコ綱	イカリナマコ目	イカリナマコ科	ヒモイカリナマコ	<i>Patinapta ooplax</i> (von Marenzeller, 1882)				2 0 近	2 0 男		2 2 椀	体長10数cm、径5mm。干潟の泥の中に生息。浮遊していることが多い。ヒモイカリナマコツマミガイ <i>Hypermastus lacteus</i> という殻高3～5mmの貝が体内共生していることがある。 ヒモイカリナマコツマミガイ 
105	脊索動物門	条鰭綱	スズキ目	ハゼ科	ミミズハゼ	<i>Luciogobius guttatus</i> (Gill, 1859)		1 9 近		2 0 近				全長5～10cm円筒形。頭は押しつぶされたように平たい。体色は、濃緑褐色。ヌルヌルとした粘膜で覆われる。ヒレは、丸みをおびる。鱗がない魚で小さなウナギかドジョウのような外見。河口の汽水域石や砂の間にいる、肉食でゴカイ、ヨコエビを捕食する。

106	脊索動物門	条鰭綱	スズキ目	ハゼ科	イズミハゼ	Luciogobius martellii (Di Caporiacco, 1948)						2	1	1	1	ミズハゼに似ているが、尾鰭の縁辺が透明若しくは白色であることで識別できる。河口や内湾の砂礫底に生息し、砂礫やカキ殻の隙間に潜む。	
107					ウロハゼ	Glossogobius olivaceus (Temminck et Schlegel, 1845)		19近	19男							体長20cmを超えることもある大型種。洞鯊(ウロハゼ)。東アジアの内湾や汽水域。夏が旬でハゼの天ぷらにされる事が多い。利用法はマハゼとほぼ同様で、唐揚げ、天ぷら、刺身などで食べられる。	
108					マハゼ	Acanthogobius flavimanus (Temminck et Schlegel, 1845)				20近						体長15cm。旬は秋から冬にかけてとされる。美味な白身魚で、天ぷら、唐揚げ、刺身、吸い物の蛸種、煮付け、甘露煮などいろいろな料理で食べられる。秋になると近木川はハゼ釣りのメッカとなる。	
109					ヒナハゼ	Redigobius bikolanus (Maeda, Saeki, and Satoh, 1927)				20近						最大体長4cmの小型種。汽水域から淡水域に生息。体長9cm前後のヒメハゼとは別種。	
110					ヒメハゼ	Favonigobius gymnauchen (Bleeker, 1860)						21	2	2	ア	体長は6cmから8cm、体色は黄褐色を基調とし、側面には暗色の斑が4つ並ぶ。尾鰭の基底にある黒色斑は成長に伴い二又する。雄のみ成熟すると第1背鰭の第2棘が糸状に伸びる。水深15mより浅い内湾の砂泥底に生息する。アマモ場や河口にも住む。	
111					チチブ	Tridentiger obscurus (Temminck et Schlegel, 1845)				20近							体長8cm。他のハゼ類と比較して太く短い体形をしている。河口域や河川下流部の礫や転石、テトラポッドなどの周辺に生息。ムナビレの根元は黄色
112					ドロメ	Chaenogobius gulosus (Guichenot, 1882)		19近									体長12cm。上から押しつぶされたように平たい頭と大きな口をもつ。尾びれが白くふちどられることが特徴。ごく浅い岩礁域(数mまで)、岩礁性海岸の潮だまりに生息。成魚は海底にいるが、幼魚は水中を群れて動く。
113					フグ目	フグ科	クサフグ	Takifugu niphobles (Jordan and Snyder, 1901)					20男				
合計								54	31	36	45	49	63				

凡例 19近＝2019年近木川、19男＝2019年男里川、20近＝2020年近木川、20男＝2020年男里川、21檜＝2021年檜井川
22檜＝2022年檜井川河口域 22ア＝檜井川河口南アマモ場の浜